

ドキュメント20世紀

# アナキストたち

バクーニンからヒッピーまで

ローデリック・ケドワード著

ツル・ピクチャーボックス

## 目次

	I	アナキスト誕生	4
	II	反抗のドラマ	34
	III	組織的反抗への道	52
	IV	自由と“無”秩序	84
	V	神話と現実の谷間	116
索引	年表		123
			126

表紙画 フランスのカルノ大統領が、一八九四年七月二四日、イタリアのアナキスト、ジエロニモ・カセリオに刺殺された情景を描いたもの（画・コンスタンチニ）

口絵 アナキストとニヒリストの爆弾と短剣でおびやかされているイギリスのジョージ五世とロシアのニコラス二世（フランスの漫画から）↓

巻末写真 フランスの下院に投ぜられたペーランの爆弾をたたえて出版された歌集の表紙

## アナキスト誕生

いわゆるアナキズムの全盛時代は、一八八〇年から一九一四年にかけてである。自動車、映画、飛行機などが発明された時代であり、子どもたちは自転車を使って親の監視の目からのがれ、都会の人びとは汽車に乗って海水浴へ行くようになり、また、いい伝えによれば、エドワード七世によって、初めて『週末』という概念がもたらさ

れた時代でもあった。騒然とし、人びとは行動的になり、『新聞』が一般化された時代でもあった。そして、それらはヨーロッパにある、むかしながらの封建的側面にも影響を及ぼしていくのであった。

アナキストたちも、その時代と同様にダイナミックであり、発明心や想像力に富んでいた。彼らの機動力は、各国の警察をおびやかし、彼らのセンセーショナルな行動は、新聞の一面をにぎわし、また彼らの闘争の理論は、ほかの革新思想を圧倒していた。

しかし、これ以上にアナキストと、この時代の類似点を比較するのは、誤解を招くことになりかねない。たしかに、アナキストたちは、時代的特色をそなえていたが、一方、時代の流れに激しく逆行しようとする

ものであった。というのは、変革を促進したこの時代は、同時に、組織化と中央集権化を促進した時代でもあった。

イギリスの社会福祉からロシアの土地政策まで、政治的にも、経済的にも、あらゆる分野で、組織化と中央集権化が進められていくのであった。とくに、このことは労働者階級にも見られる。貧しい労働者の食糧を求めている、自然発生的暴動や農民の土地を求めている一揆が、一八世紀の特色だとすれば、一九世紀は組織労働組合や社会主義政党による計画的革命の時代といえるだろう。

アナキストたちは、まさにこの組織化され、特定の人間に権力が集中していくことに、強く反抗したのである。これは「アナ

左 G・プレスチによる、イタリあのウムベルト国王暗殺の模様へ画・コンスタンチニ



キー」という言葉自体「無政府」を意味しているのであるから、当然のことかもしれない。

しかし「無政府」とは、どういうことであるのか？ とにかく彼らは、だれか特定の間人が、ほかの間人を治めるということそのものに反対し、一九世紀のかかえた数かずの禍い、不公平など、あらゆる「悪」は、みなそのためだと考えるのであった。アメリカのアナキスト、マイケル・シュワップは、一八八六年に、シカゴの労働者の苦しみを怒りをこめて訴えている。

「何千人にも及ぶ労働者が、まったく日の当たらない室に住まざるをえないのが現状だ。雨・風をしのぐことすらできない者もいる。一室に四家族がおしこまれてもいることも、めずらしくない。そして、彼らの食糧は、ごみための腐りかかった野菜と、くず肉にたよっているのだ。これがいわゆる文明国での話だから、ひどいではないか」  
彼はシカゴの話をしたのだが、これは、当時のロンドン、パリ、トリノにもそっくり当てはまることであり、スペインの農村アンダルシアやシベリアにも、ほぼ同様のことがいえた。

社会の発展を謳歌し、技術的發明や、物質的利益を追い求めたこの時代の社会の底流には、つねにこのような、極度の貧困が存在していたのである。アナキストたちは、このような国家の支配者たちは、許しがたい偽善者であり、その統治するということ、そのものが人間の自由に対する暴圧であると主張するのであった。

お金持ちは 城に住み  
貧乏人は アバラ屋に  
神は 貧乏人とお金持ちとを  
つくりたもうた

神のみ教えに従い  
神がつくりたもうたように  
それぞれの家にあれ

こういふふうには、当時のキリスト教信者たちが満足気に歌っていたというのだ。アナキストたちは、まさに、このような考え方に怒り、平等な社会のためには、すべての権力を破壊し、ひとりひとりの人間が、自分の能力にあわせて、幸せに暮らせる社会を作るしかないと考えるのであった。そして、まさにこの点において、あらゆる束縛や圧力から人間を解放しようと、アナキストたちは結ばれていたのである。

しかし、この思想の性格からも推測できることだが、これ以上の点では、アナキストたちは、まさに十人十色であり、統一した理論は形成されず、いつまでも異なる思想、異なる行動の「モザイク」にすぎなかった。どうやって権力を破壊するか？ いかにして、その偉大な変革をなしとげるか？ アナキズムは最初から、これらの疑問に対して、完全な答えを持っていなかったのである。

### 革命の予言者たち

アナキズムの初期の指導者であった、ミカエル・バクーニン（一八一四～七六年）は、農民、産業労働者、知識階級の失業者、学生などの不満分子など、すべての下層階級による、急激な革命を主張した。有名な音楽家、ワグナーは彼を「神の破壊者」といったが、これは強健なからだの持ち主で、食欲旺盛なこの男にふさわしい表現だ

左 アナキズムの代表的理論家P・J・ブルードン。ギユスタフ・クールベの画「我々の最大の指導者」





ったであろう。彼は、国際的大革命をひき起こそうとしたが、アナキストたちは、統一運動を行なうには、あまりにもバラバラであったため、革命はすべて悲喜劇に終わってしまった。

バクーニンはひとりさびしく、社会の落伍者としてその生涯を閉じたが、彼の未完成的の大革命は、ヨーロッパ各地に影響を与え、彼の理想は、伝説の中に生き残っているのであった。

このバクーニンが「我々の最大の指導者」と尊敬していた人物がいる。ピエール・ヨセフ・ブルードン（一八〇九―一八六五年）である。

彼の理想は、それぞれ独立した経済体の中で、ひとりひとりが公平な仕事の分担を受け持ち、幸せな、しかも野心のない人生を送ることが出来る社会を作りあげることであった。彼自身、印刷業を営んでおり、

その職人的感覚が彼の思想にもよく現われている。たとえば、彼のいう独立した経済体というのは、中世のギルドに似ていた。したがって、彼の思想は、職人や、インドのように産業革命のあまり進んでいない国々には、強い影響を与えたのだが、この時代の新しい産業化社会に適したアナキズム思想ではなかった。

事実、彼はいつそう相互依存を深めていく経済機構を、どのようにして独立した経済体にしていくかという疑問には、明白な解答をもっていなかったのである。

バクーニンとブルードンは、ふたつのタイプのアナキストを作り出した。ひとつはバクーニン派、すなわち、直ちに古い社会を滅ぼし新しい社会を形成するため大多数による革命を主張する人びとであり、もうひとつは、ブルードン派、つまり、労働に

対して公平かつ平等な収入が得られる独立経済機構を作ることを目指す人びとである。

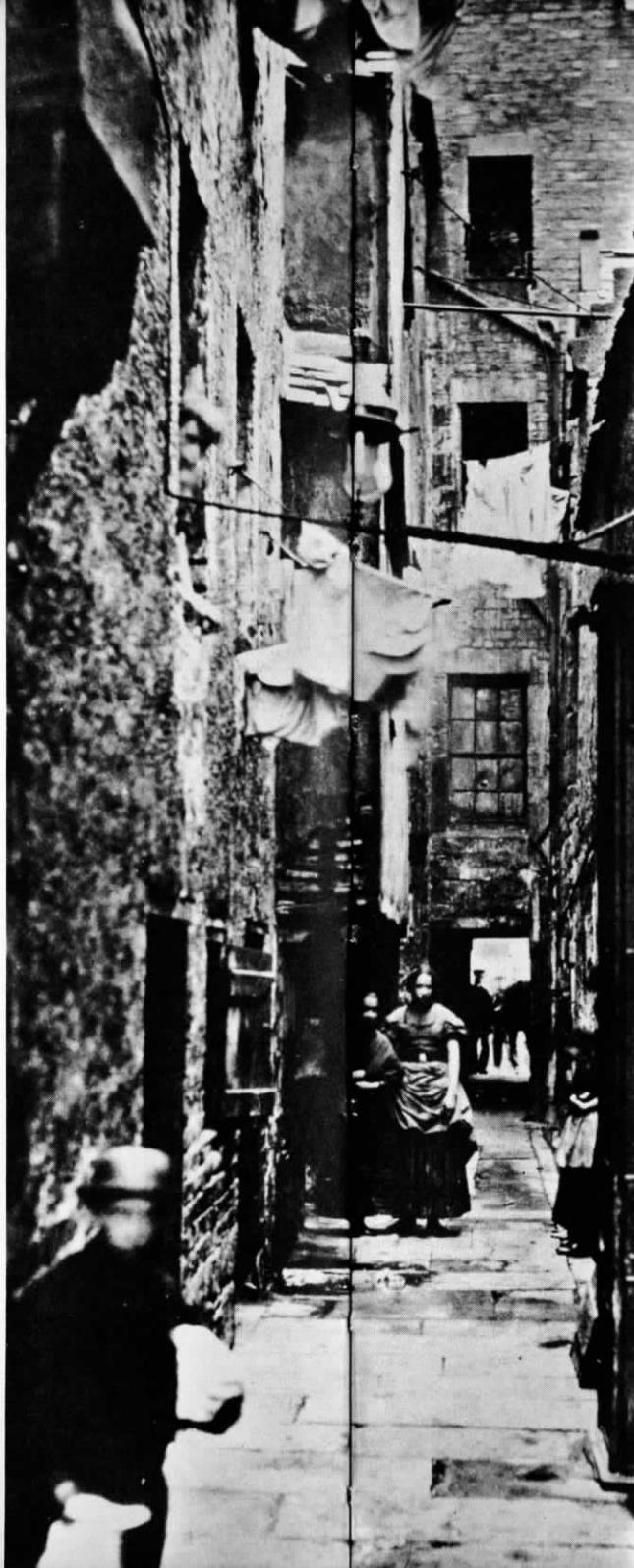
一八四八年から一八八〇年までに現われたアナキスト思想は、ほとんどがこのふたつの流れをくむものである。若干の例外に、スイスの時計職人を組織化しようとしたジエームス・ギヨーム（教師）らの地方のアナキスト指導者がいる。

しかし、一八八〇年以後は、いろいろなアナキスト思想が生まれ、アナキスト運動のパイオニアであるバクーニン主義、ブルードン主義も、たんなるふたつの例でしか

左 急激な産業化と人口増加にもなう当時の貧困（写真・左下と右上）がアナキズムの温床であり、多くのヨーロッパ人はアメリカへ移民（写真・左上）したが、そこでも同じような事情が待ちうけていた。



Pierre KROPOTKINE



なくなっていくのである。  
このふたりについて、すぐれた地理学者でもあったピーター・クロポトキン（一八四二—一九二一年）が現われるのである。クロポトキンはこのころのアナキストの理論的指導者としては、とびぬけた存在であり、共産主義とアナキズムの混合思想とも考えられる。彼の思想は、人びとに大きな影響を与えた。彼は高度な文明は、「競争」によって作られるのではなく、「協力」によって作られるものだと考え、あらゆる運動の原動力として「協力」こそ大切なことであると人びとに説いた。

このように考える彼は、典型的な楽観主義者ともいえるが、同時に当時の社会的腐敗を許すことのできないひとりでもあった。一八八五年に出した、「青年に告ぐ」というレポートの中で、彼は次のように書いている。  
「——科学の進歩によって、労働者の生活も向上すると夢みている若き諸君！ 目を大きくあけてみたまえ、私たちのまわりはなんと多くの欺瞞に満ちあふれていることだろう。君たちは、だれのために働いているのか。……いま、ここに鉄道がひかれるでしょう。若き君たちは、その知力と体力の限りをつくして、その計画のために、すべてをささげるであろう。そして、その鉄道は、崖をまわって山脈を貫通して、ふたつの国を結ぶように計画されているだろう。しかし問題は、その後の話だ。多くの労働

者は、そのうす暗いトンネルの中で疲労し病に倒れていくのだ。その鉄道は、結局、労働者の死体の上にひかれるのだ。いやしむべき貪欲な人びとの犠牲となって——。そして最後に、鉄道が開通したとき、それは侵略軍の兵隊や兵器の恰好な輸送に利用されることを、君は初めて知るだろう。——」  
しかし、この「搾取」と戦うのに、はたして「協力」がもつともよい武器なのだろうか？ 多くのアナキストにとつて、クロポトキンの理論的主張は、あまりにも理性的であり、空想的ですらあった。クロポトキンは激しい性格ではなく、実際はより穏健な改革を望んでいたのだが、過激なアナ

左下 ピーター・クロポトキン。  
左下 ミカエル・パークニン。  
右 グラスゴー（スコットランド）の貧民街——  
九世紀の産業国にみられる典型的な都市風景。

キズムの流れから、まったく離れることもできなかつた。

彼はときに「書物と剣と銃とダイナマイトによる永久的革命、すべて法の外にあるものは、私たちにとつて『善』である」と呼びかけると、アナキストたちの反応はよかつた。そして、一般には、彼の革命への呼びかけは彼の「協力」への呼びかけ以上に有名になつていったのである。

### 殺せ、折れ、そして死ね!

一九世紀のアナキストにとつて「暴力」こそが、もつとも即時的でかつ劇的な手段であることに変わりはなかつた。暗殺と爆弾——によつて、社会は変革されるという可能性を追求していくのである。実際、一

般市民にとつて、「アナキー」という言葉そのものが「暴力」を意味していた。

アメリカのテオドール・ルーズベルト大統領の言葉が、このころのアナキストに対する一般市民の感情をうまく要約している。「アナキズムは全人類に対する犯罪行為である。世界中のすべての人びとが団結して、アナキストとたたかかねばならない」(一九〇一年)

これは、各国の大統領や、政府要人、ときには一般市民をもまきぞえにして、殺害をくり返したアナキストたちに対する、当時の大多数の人びとの代表的な考えだといつていいであろう。しかし、アナキストはそれと同じ非難を、政府、教会、資本家らのブルジョア階級に対して、あびせ返している。「おまえたちこそ、暴力によつて、権力を

行使してゐるではないか。歴史というものは、支配者の決定の下で行なわれた暴力は正当化し、美しく飾りたてるが、暴力は最後まで暴力でしかない。おれたちにもその暴力から個人を守るために暴力を使う権利がある!」

キリストの名のもとに 進め  
われわれは隣人を 愛しつづ  
人に殺される前に 殺してしまえ  
神のみ心に従い  
進め 殺せ ゴウカンしろ!  
すべての行為は神が許したもう  
聖霊の名のもとに  
行け 殺せ 折れ そして死ね!

左 イタリアのジェロニモ・カセリオによる  
フランスのカルノ大統領暗殺の様相—この劇  
的暗殺事件はアナキストをさらに悪名高いも  
のにした。





そして、当時、讚美歌から作られたこの替え歌から彼らの暴力に対する考え方を感ぜることができる。

アナキストたちが、彼らの行動を、ひとつの防衛手段であると信じていたことに疑う余地はない。しかし彼らの統一性のないバラバラに行なわれるテロが、かえって警察力や軍隊の力を強化させることになり、ついには、いかなる方法でも、権力体制を傷つけることができなくなっていた。そこから、やがて彼らのいう理想社会の実現のために、はたして暴力が正しい手段なのかということに、彼らの中からも疑問が生まれてくるのであった。

この疑問の中から次にのべるふたつの思想が生まれたが、しかし当然のことながら新聞の紙面をにぎわせたのは、つねにそのテロ行為の方であったから、アナキズムが

人びとの正当な評価を得ることは困難であった。ひとつは極端な個人主義ともいえるべきものであり、もうひとつは、サンジカリズム（革命的労働組合主義）と呼ばれるものである。

### ① 個人主義

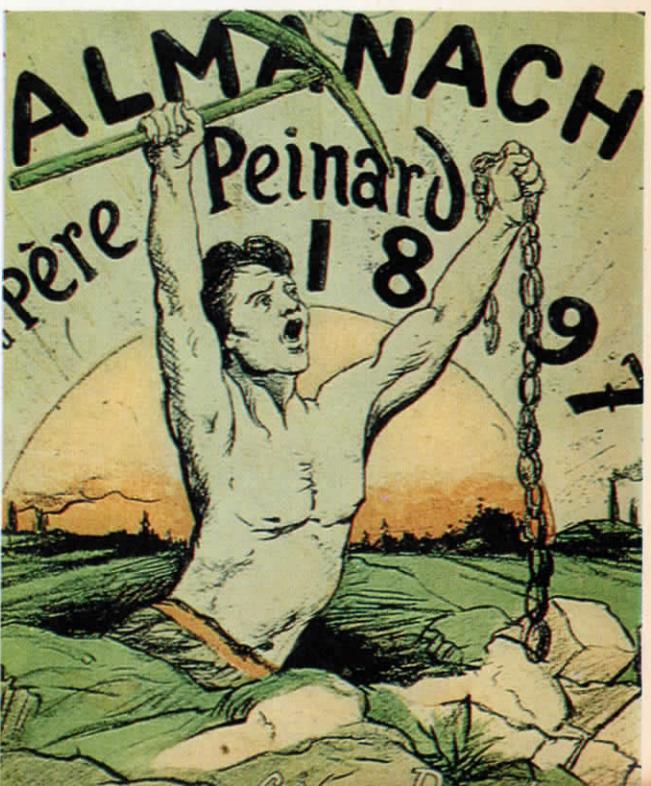
彼らのいう個人主義とは、外的圧力やいままでの偏見から解放された人間は、幸せな人生を送ることができるという考え方もとづいていた。そして、その最大のポイントとは、社会変革を待たずにひとりひとりの人間が、ただちに、アナキスト思想を、その生活の中で行動に移すということであった。

彼らの「鍵」となる言葉は「自由」である。結婚制度を否定するものは、同棲したり、またはフリーラブ共同体を作った。戦

右 爆弾を使ったテロで名を売ったラバコールの逮捕。

争を否定するものは兵役を拒否し、社会法を否定するものは、それを無視して生活し、女性解放を主張する女性は、男の仕事をし、産児制限を行なった。

つまり、既成の道徳にとらわれず、ひとりひとりが自分で考えることを大切にしたのである。しかしこの考え方はアナキズム特有のものではなく、むしろ西洋思想の歴史の中にもっとも根強く流れているテーマのひとつとみることができ。それはあらゆる変革者、または異端者の思想の中に流れているものである。ごく最近起きたパリの五月革命の学生たちの中にも、この個人主義的傾向がみられる。つまり、ほとんどのアナキストの思想と行動の中に、一貫して流れているテーマといっても過言ではな



い。  
 とにかく、人間を動物の一部であるとする考え方や、ときには機械以下であるとする考えに真向から反対する、この個人主義思想は、クロボトキンの「協力」の思想同様、ある意味では、人間主義的オプティミズムであろう。

この思想の黄金時代は、一八九四年から一九一四年にかけてであり、芸術を中心とするあらゆる分野で、この個人主義的な自己主義が、さかんに行なわれた。

この時代のフランスの思想家、パラフ・ジャバルは、アナキズムを独特の論理的思考であるとして、次のように書いている。「いま、自分をアナキストと称している連中は、みんなブルジョア階級より無知で、不潔で、しかも病的である。連中はアルコール中毒者、ニコチン中毒者、または誇大

妄想狂である。本当のアナキストとは、論理的に、また科学的に考えることのできるものことである」(一九〇八年)

これは、個人主義のアナキストのみをとりあげ、それを本当のアナキストであると考えていたのであって、アナキズム全般の複雑な性格にふれるものではないが、当時の個人主義の強い影響を反映しているものとして、興味ぶかい定義のしかたである。

また当時の特色ある個人主義の指導者として、ヨハン・カスパー・シュミット(一八〇六一一八五六年)をあげることができ。彼は女学校の教師で、温和な性格であったが、その主張する個人主義はかなり徹底したものであった。国、家族、または他人を犠牲にしても、自分自身を大切にすることが最高の「善」であり、そのためには、反抗も犯罪もやむをえないことなのだ、

右 上下とも、フランスで最も有名かつ過激なアナキスト機関紙「l'almanach du Pere Peinard」の表紙。  
 左 アナキストを鎮圧したフランスの軍隊と警官隊。

人びとに説いた。彼は、生前あまり重要視されなかったが、一九世紀後半には、彼のペンネーム、マックス・シュテイルナーの名で個人主義運動に大きな影響をあたえた。

## ② アナルコ・サンジカリズム

アナルコ・サンジカリズムは経済的な問題を中心に取り上げ、労働組合を通じて、変革を進めようとした。つまり、彼らの根本にある相反するふたつのテーマ、「自由」と「組織」をうまく調和させようとした点で、従来のアナキズム運動と大きな違いが見られる。

# “全人類に対する犯罪”

アナキストの無差別テロが、個人の命をおびやかすばかりでなく、それ以上に彼らの思想が、社会の秩序を保っていた既存概念と組織への攻撃であるため、人びとの強い反感を買った。新聞や雑誌も彼らの行動を恐ろしいものとして、センセーショナルに扱ったことはいうまでもない。

**写真右** グリーンビレッジでの爆破事件の犯人を追跡するもようを、くわしく伝える絵入りロンドン・ニュースの紙面である。ジョセフ・コンラッドはこの事件にもとづいて小説「秘かなる行爲」を書いた。

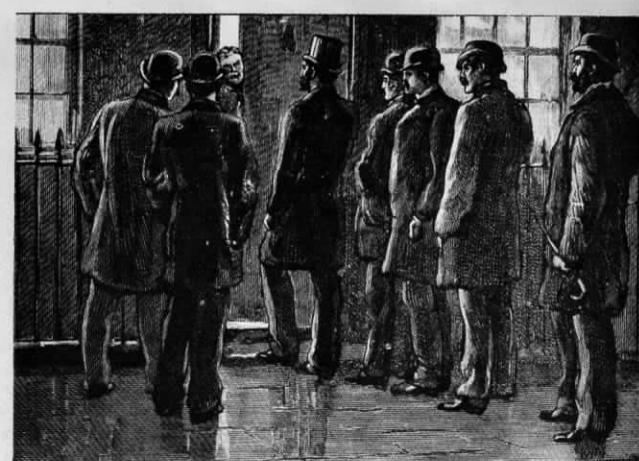
**写真下** 一般的に信じられていたアナキストの爆弾製造所。



爆発後、研究所



の付近で犯人のひとりを見



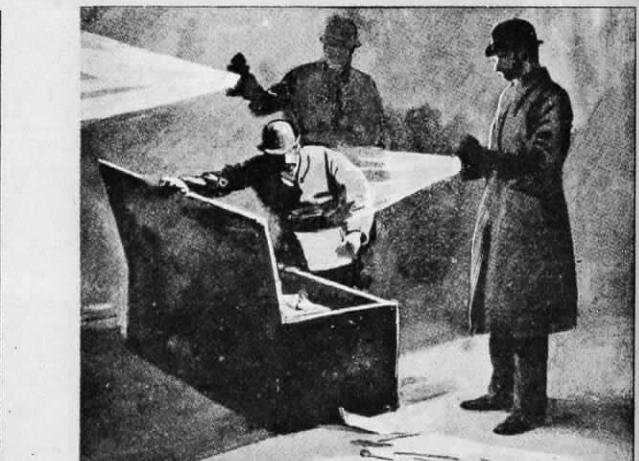
9時ごろ、私服警官がクラブ“オートミー”へのりこ



アナキストたち



の所有物はすべて調査された



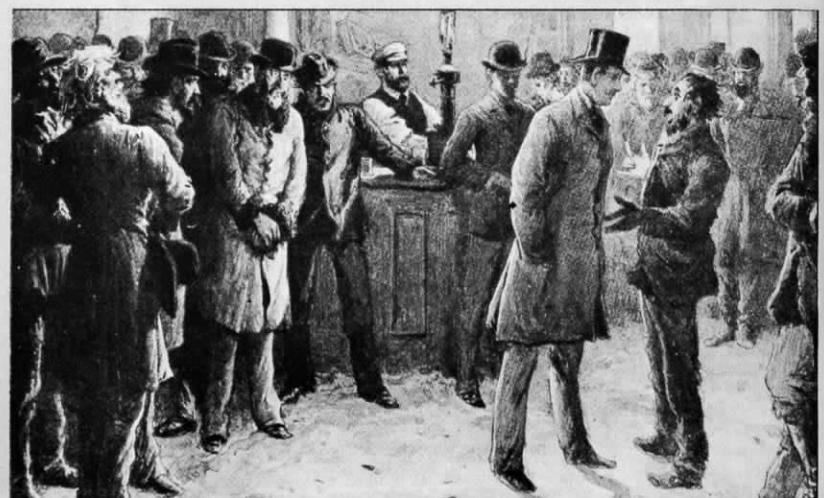
証拠をさがすため、クラブのすみずみまで調べた



バーではひとりひとりに



職務質問した



警部はクラブのメンバーをいよいよ言葉で一室に集めた



Prix : 0,10



## LE SALARIAT



従来のアナキズムは、権力の集中する恐れのある「組織」そのものに、反抗してきたのであるが、彼らは労働組合によるゼネストで労働者の正当な権利を獲得し、自由で公平な新しい社会変革にまで、それを高めていこうと考えた。そして彼らは資本主義を滅ぼした後に、その灰の中から、不死鳥のように、アナキズム社会は誕生するのだという理想を掲げて登場し、実際に、経済的革命を押し進めた。

このアナルコ・サンジカリズムは、数多いアナキスト的変革運動の中でも、実質的な成果をおさめたという点で、もつとも有効な手段であった。彼らは、労働者教育の問題や、賃金問題などに、具体的な成果をもたらしたのである。

しかし、このサンジカリズムをもつてしても、権力の打倒は最後まで難問題であり、

彼らの目ざす「自由」を目の前に見ながらも、手が届かないといった状態が続くのであった。

皮肉な言い方だが、もし彼らが、その難問題を解き、自由を手に入れていたら、アナキズムは、その生き生きとした性格を失っていたであろう。アナキストたちは、真実と平等と自由を柱に、新しい社会が建設されることを信じて、その日のために働き続ける人びとであった。そして、その理想が未完成であるがゆえに、かえって、アナキストたちをふるい立たせずにはおかなかったであろう。

アメリカのアナキスト、オーガスト・スバイスは死刑の判決を受けたとき、次のように語った。

「もし、あなたが、日増しに広がるこの理想を、私たちを死刑にすることによって破

壊できると思うなら、しかもなお、あなたが再び真実を話す勇氣ある者に死刑を宣告するのなら、そして死が真実を語ることに對する唯一の代償であるなら、私は誇りをもって、その高価な代償を支払おう。死刑執行人を呼べ！ ソクラテス、キリスト、ジョルダン・ブルーノ、フス、ガリレオ、みんな真実のために殺されたが、彼らの真実はいまだに生き続けている。私も彼らの後を追うのだ！」

彼も、アナキズムが真実であり、最後には真実が必ず勝つことを、心から信じていたひとりだった。

左 上下とも、言葉による永久革命「をめぐしたアナキズムの代表的理論家、クロボトキンの著書二冊の表紙。  
右 ストライキ会議から帰るフランスの労働者。



## ラバコールの伝説

一八九二年三月一日、パリの中心地サンジェルマン通りのビルに爆弾が投げ込まれた。そして、同じ年の三月二十七日、クリシー通りのビルにも……。

それから三日後、このふたつの事件の犯人が逮捕された。犯人はフランソワ・ケニグスタイン、またの名をラバコールという男であった。そしてすぐ彼の長年にわたる犯罪歴が明らかにされた。宝石を盗むため死体を墓から掘り出したこと、老人を殺害して大金を盗んだことなどが、一般市民に伝えられた。

裁判でラバコールは死刑を宣告され、七月一日、彼の最後の叫びはギロチンによって途切れてしまった。

「ビバ・ラ・レ…(Vive la Ré…)」

警察はこれを共和国(République)万歳と解釈したが、実際には、革命(Revolution)万歳であったことは明白である。

彼は死刑の判決にもなら弁明らしいことはせず、堂々と、ギロチンにかかったことから、アナキストの間では、ますます彼の死を一種の英雄視する風潮が生まれた。彼の行動を賛美した歌が作られ、パリの貧民街のうす汚れたカフェなどで歌われていたという。

こうして、アナキストのテロ行進も最盛期を迎えると、人びとの間にも、いったいアナキストってというのは、どんな人間なんだ? という疑問が高まり、各分野の専門家、その分析をするようになった。

一八九四年、イタリアの有名な犯罪学者セサレ・ロンブロッソによって、はじめてテ

ロリストを性格類型によって分ける試みがなされた。

そのひとつ、「先天的犯罪者」と呼ばれるこのタイプの人は、顔立ちからしてその犯罪性をあらわし、そのいい例がラバコールだということであった。残忍な、くずれた顔だち、顔全体とくらべて、バカでかい鼻、そしてその鼻が左へ曲がっている。また左と右では高さのちがうハンドルみたいな耳、そして四角い大きなアゴ……。これは、一般的に知られているラバコールのロマンチックな顔からはほど遠いものだった。

ロンブロッソによるとこの種の顔だちが、アナキストには多いというのである。彼が調べたパリの四一人のアナキストのうち、

三パーセントは、この「犯罪者の人相」の持ち主であった。そしてシカゴでは、四人のうち四〇パーセント、トリノでは一〇〇人のうち三四パーセントもあつた。

一方、ほかの過激な運動にたずさわつてゐる人を調査しても、この型は一二パーセント以下であつたと報告している。そのほかには彼は、この生まれつきの犯罪者タイプのひとつの特徴はいれずみをする習性があることだと思つて加えている。彼はアナキストたちのからだから、イカリの絵、ハート型、弓の絵、またときには英語で「I love you.」などと書かれたいれずみを発見したといふのだ。

これらの観察はいまとなつては、少々こつけいとも思われるが、同時に、ロンプロソは、アナキストをつくり出す社会的な原因に対しても、鋭い批判力を持つていたこ

ともつけ加えねばならない。

しかし、アナキストを犯罪者の人間だと分類したことは、これが、この時代の代表的学説となつたことを考えあわせると、重大な問題を残したことになる。以後、一般世論はアナキストを犯罪者として扱うようになり、歴史家たちもテロリストについては、同じように犯罪者、狂信者、または精神病患者のいずれかにきめつけて、多くは語らず、ほかの、より賞賛に値するアナキストたちについてのみ、語るようになった。

しかし、テロリストの精神状態やその生い立ちなどは、多くの点でほかのアナキストとも共通することが観察された。

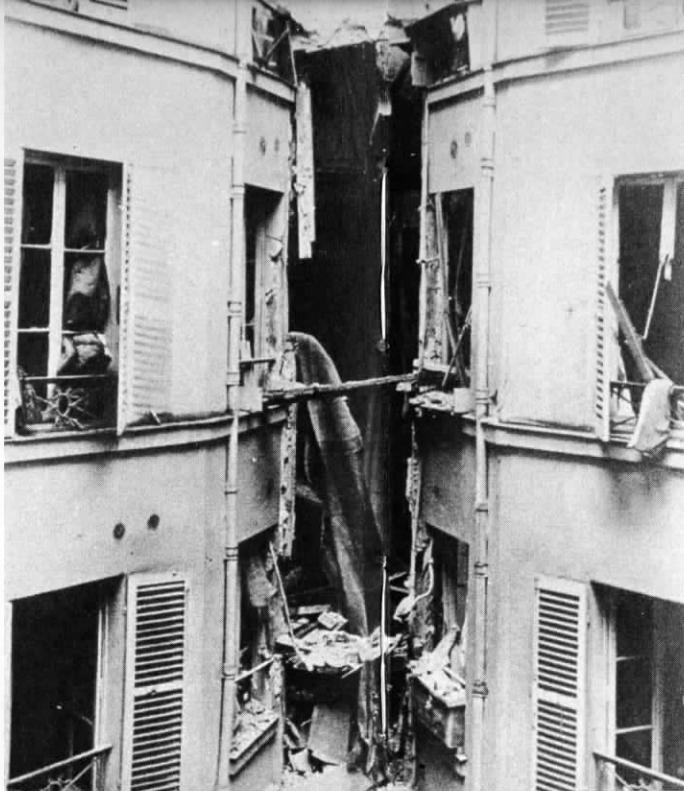
まず第一に、大多数のテロリストたちも、不幸せの種を持った人間であつた。孤独な性格でありながら、自由を大切に考える人

たちであつた。ラバコールも未婚の男女の間に生まれた私生児であつた。幼いラバコールは孤児院で育てられ、八歳のときには、すでに牛のせわをする労働者として働いていた。お金や服などを乞食のようにめぐんでもらわなければならなかつた幼年時代である。職場はつきつきと変わったが、いつも貧しいことに変わりなかつた。

少年時代に愛を奪われた彼は、とてもなんか好きな、疑い深い性格を持つようになつていた。だから、彼が暴力の思想をなんとなくうけ入れたのも不思議なことではなかつた。

左上 カフェ・テルミナス爆破に使われたのと同種の爆弾。

右上 ラバコールに爆破されたクリシー街。下のバリの警察が考えだした不発爆弾を運ぶ馬車。



イタリアの暗殺者、ルイギ・ルケニも同じようなケースである。彼も九歳にして鉄道で働き、転々と職を変え、しだいにすべての支配者に対して、深い憎悪の念を抱くようになっていった。

孤独と貧困におちいった彼は何かセンチメンタルな行動によって、有名になることを夢みていた。

「誰か殺したい、でも重要人物でなきゃ、新聞に出ないもんね」

などといった。

そして、一八九八年九月一日、政治とは無関係であり、悲しい恋の詩ばかり書いていたオーストリアのエリザベス皇后を刺殺したのであった。

アナキズムの歴史を通して、このラバコールとルケニの人生にみられるふたつの要素、つまり、社会的不幸と強い独立心が

つねに存在していることが発見できる。原因は、このふたつ以外にもいろいろあるが、一般には、このふたつの要素の組み合わせで、アナキストの誕生が説明されている。

とくに、その独立心は、手工業者や貧農などには、根強いものがあつた。

彼らは賃金労働者になるより、独立を望み、農業労働者になるより、小さくても自分の土地を耕すといった傾向が強かつた。

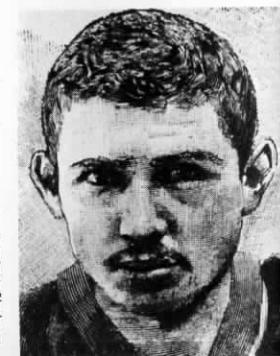
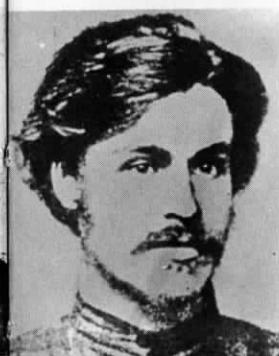
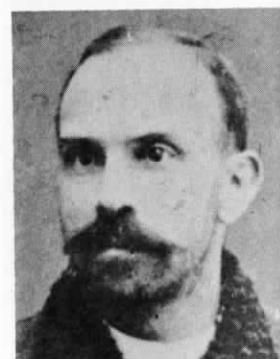
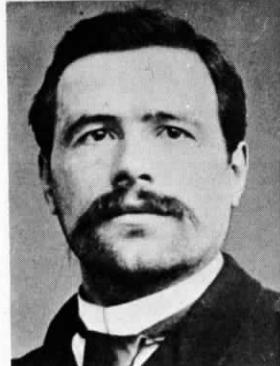
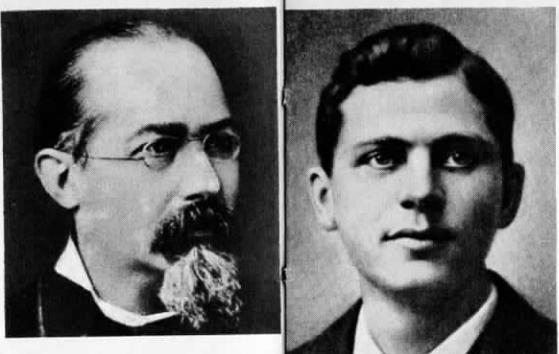
だから彼らは、その独立心のために、経済的にもピンチに追いやられると、その独立心に頼ってピンチを脱しようとするのであつた。しかしほかと協調しようとならないが、今までの独立心が、資本家からもマルクス主義者からも非難されたのだが、しかし、唯一つ、アナキズムだけは、彼らの選んだ道を生きる権利を正当化していた。一八九四年のリヨンの警察の記録による

と、一五二人のアナキストのうち五五パーセントが手工業者であり、その内訳は三人の靴職人、一六人の織物業者、一人の左官職人、八人の染物業職人となっている。

### 農村のアナキスト

スペインのアンダルシア地方のアナキスト指導者は、みな農民出身であつた。苛酷な境遇にあつた彼らは、つねに飢餓におびやかされてきた。だからヘレスの反乱（一八九二年）のように、反乱はほとんど食糧の不足する冬の間に起こつた。

スペインの村々ではシビルガードとよばれる政府機関がこの反乱を鎮圧していた。しかし彼らが銃を持って村へはいっていくたびに、農民たちはますますその独裁的な



統制を意識するようになり、ついには、国家の独裁体制を完全に破壊することを目的とするアナキストたちが出現したのであつた。事実、バクーニンの革命の理想は、彼らに神秘的なまでにうけていたのである。フランスでは、いわゆるこの農民アナキズムという現象は少なく、アナキズムは“都市”の悪い影響だと考えていた。

シャルル・カルメル博士は次のようにアナキスト誕生の契機を説明している。

「農村の少年が、都会で彼らの社会的地位をはるかに越えた教育をうけると、やがてふるさとをすて、彼らの家族にとつては、なんら役にたたない勉強にうちこみ、ついにはその努力が彼らの生活をささえるにはなんの役にもたないのだとわかつたら、どんなことが起こるだろう。苦しいことはみな社会の責任と考へ、悪がはびこる退廃

的なグループの仲間にはいるであろう。そしてその日ぐらしの生活を続けているうちに、危険な友人関係を持ち、ついには破壊を夢みるようになる。この少年は、かつてはまじめな力強い労働者として働き、かわい農村の娘と結婚し、ふたりの間には、フランスの宝となる子どもが生まれるはずだつた。そんなすばらしい可能性にみちあふれていた、この少年の未来をうばつたのはじつに都会といふところである。

さらに、カルメル博士はアナキストをすべて農村へとつれもどすほかないのだと人びとに説いた。

カルメル博士は多くのアナキストを生み出したある社会的な集団についても述べている。その集団とは不安定なその日ぐらしの生活をしている学生と、そのまわりにいる知識階級のことをさしていた。

右顔写真 左上から、イタリアの犯罪学者ロシブロン。その彼が犯罪者タイプの典型といつたラバコール、ベيران、カセリオ。右上ツオルゴス。以下、アレキサンダー二世の暗殺を企てたロシアのアナキスト、ソフィア・ペロフスカヤ、シャルターリン、バルマソフ

一九世紀の学生がすべて、親の財産で一流大学にかよつてゐる良家の息子ばかりではなく、なかには能力がみとめられながらも経済的な理由で学業を中断せざるを得なくなるものも少なくなつた。屋根裏部屋に住む飢えた貧乏学生は、なにも物語の中だけではなかつた。

また、なんとか学業を終えたとしても、それで生活の保証が得られるわけでもなかつた。ロシアでも大学は本来国家公務員になるためのステップであつたが、多くの貧しい学生は給料の安い一般事務員にしかなれなかつた。それも自由主義的思想を語つて退学にならなかつたら話である。



当時、ロシアは、皇帝の勅令（一八八四年）により、大学のクラブや団体は解散させられ、自由思想を持った教授は追放された。大学の自治はまったく解体していた。

学生たちは、たえず行なわれる権力の介入に怒り、彼らを中心としたアナキストグループ「黒旗団」が組織された。その団体の平均年齢が二〇歳そこそこだったことから、学生がその指導的地位にいたことがわかる。

学生たちは、たんに彼らが貧しく、また失業していたという理由からだけでなく、社会の部分的な改良に失望して、全面的な革命を要求していたことから、アナキズムに共鳴していったのである。

アナキスト学生は、彼らからみてその論理があまりに難解かつ学問的すぎるマルクス主義を軽べつしていた。彼らは前にのべ

た手工業者と同じように、あまりに孤独であつたため、労働組合や政党などの組織による解決を望まなかつたこともひとつの理由であろう。

彼らの絶対権力に対する強い憎悪はペテルスブルグのアナキストグループのスローガン「力強い、残忍な人民の復讐」によくあらわれている。

ここで、いちおう、アナキストが職人、貧農そして学生によって形成されていたということができるが、しかし、かならずしもこれらのグループから出ていたというわけではなく、むしろ一般には、アナキストは特定の階級またはグループの利益代表とはいいがたいものがある。これはアナキスト運動の長所でもあり、同時に短所でもあった。

力強い階級的団結と、そのバックアップ

右 ロンドンに追放されていたときのエリコ・マラテスタ。

なしに、彼らはしばしば無力であつたが、同時に権力の犠牲者のすべてから支持が得られるという点では、せまい階級の利益を超えているということも考えられた。

アナキストは階級的意識がないからアナキストなのだということもできよう。事実、多くの名の通つたアナキストは労働者階級以外から出ていた。

バクーニンとクロボトキンの両者はともにロシアの貴族の生まれであり、イタリアのアナキスト指導者カルロ・カファイエロも裕福な家の出身であり、エリコ・マラテスタにしても、少なくとも中流以上の家の生まれである。

これらの人びとをアナキストにおいやつた力は、いったいなんだったのであろうか。



上流階級の人間が下層階級に対する同情の表現としては、古くから慈善が普通であった。たとえばマラテスタはコレラ患者のために働いていたが、それがたんなる慈善活動だったら、それだけで終わつたかもしれない。クロボトキンもシベリアの鉞山に働く囚人たちに同情するだけで満足していたら、それまでのことだったろう。それが約束された未来を捨て、言葉と行動によるアナキスト活動に熱中するようになったのである。そこには、少なくとも、彼が将校だった軍隊での経験から、権力とは腐敗でしかないと考えようになった、なんらかの契機があったにちがいない。

彼のアナキズムは知的な反抗であり、最後まで個人として反抗したが、しかし決して彼の属した階級の代表者ではなかったのである。

イギリスの詩人ハーバート・リードは、アナキストを弁護し、フロイド流に、「私はアナキストを、成人した後も父親の権力に反抗しようとする男と定義する」と語っている。

### 信仰をすてたアナキスト

フランスのカルノ大統領を暗殺したジェロニモ・カセリオ(当時二一歳)は熱心なカトリック信者であった。神学校へ入学し神父になることを夢みていた彼も、一七歳のとき、ロムバートの農民の貧しさにふれて、アナキズムへと走るのであった。しかし、だからといって、彼の誠実な性格が変わつたわけではなく、最後まで、母親に対しては強い愛情をいだきつづけていた。

右 エミール・アンリのカフェ・テルミナス  
爆破事件。

裁判の後で母親にあてた彼の手紙は、そのことをはつきり物語っている。

おかあさん、ぼくの心は今でも清らかです。そしておかあさんを思うぼくの心は、いまも少しも変わりません。ぼくがこのような事件を起こしたのも、あまりにも世の中が邪悪だからなのです。ぼくはそれにたえられなかったのです。

また、アメリカのアナキスト、サミエル・フィールデンは、メソヂイストの牧師であり、日曜学校の先生でもあった。彼の場合は、宗教に反抗して、アナキストになったのだが、なつた後もその宗教の影響は残っていた。彼の言葉の中に、「私は、いずれ、よりよい理解、よりすぐ

れた理性の支配する日がおとずれることを信じている。そして不公平、悪、また腐敗の山の上に、正義と真実と公正の太陽が、その解放された世界を輝き照らす日がくることを信じている。」

アンダルシア地方での、アナキストたちも、まさに宗教的情熱に燃えていたという点では類似している。アナキストの指導者は、宣教師のごとく村から村へと説いてまわった。

最初は、世間体を気にして、アナキストにはいることをこわった人びとも、居酒屋や集会所などいたるところですでに「さつた人びと」に声をかけられ、しだいにアナキストの「信仰」をいだいていくのであった。やがて村全体がアナキズムに「改宗」すると、その興奮はほかの村へと伝染していった。

いずれにせよ、彼らの聖書は「土地と自由」であり、宣教師はその中のひとつを読めば、それだけで農民は新しい信仰に啓発されたことを感じるのであった。

### 幸せなアナキスト？

フランスの社会学者のペイルアツシ博士は、あるアナキストをくわしく調査している。その報告によると、アルペイル・レランというアナキストは、三児の父であり、パリの小さなボール紙工場につとめ、単純労働ではあるが安定した生活を営んでいた。その彼が、

「私はまったくの理論的アナキストであり、現社会が腐敗していることは知っているが、個人的に何も文句はない」

と語っている。

彼は一度、社会主義思想をいだいたが、のちに、クロボトキンの書物にふれ、アナキズムに魅せられていった。彼は自分自身を教育していくことに情熱を燃やし、人びとのために小さな図書室を作ったりもした。彼はテロリストに共鳴することはできなかったが、彼の見方はかなり同情的であった。

彼は晩年にはいなかに小さな土地を持ち生涯アナキズムを信じつづけたのである。ペイルアツシ博士は、そうした彼の思想は、すべて本から得たものであると結論している。

左 スラム街の貧困な生活——ポロひろいをする人



以上のべてきたように、さまざまな性格や側面を持つこれらのアナキストたちに、一般的な定義づけをするのは困難なことである。はじめにのべた極悪人、陰謀者のイメージを持つアナキストは、むしろそのひ

とりの人間の性格としてとらえた方が妥当かもしれない。あえてひとつの定義を与えないならば、マラテスタの言葉を引用するしかないであろう。

アナキズムは、社会的不公平に対する正当な反抗として誕生したものである。では、次にこの「反抗のドラマ」のくわしい記述に移ろう。